

「デフォレスト先生ご召天十五周年記念祭」報告

石 村 真 紀

神戸女学院第五代院長であり、名誉院長でもあるシャーロット・バージス・デフォレスト女史 (Miss Charlotte Burgis DeForest, 1879-1973) は、四五年の永きにわたって学院のために尽くされ、またそのうち二五年は院長として重責を負われた。周知のように、女史の在任期間は神戸女学院が、また日本全体が、大きな変転を経験したときにあたる。その中であって、深い愛情と毅然とした精神をもって見事に使命を全うされた女史の生涯は、まさに真の宣教師・教育者のものであった。女史と共に学院に在った同窓生、教職員、関係者が一様に深く感銘を受け、今なおそれを守り育ててゆこうとする気持ちを失わずにいる所以であろうか。

デフォレスト女史が米國クレアモントで九四年の生涯を終えられてから、一九八八年はちょうど一五年目にあたる。女史が亡くなられた後、その遺灰が女史の父ジョン・ハイド・デフォレスト博士 (Dr. John Hyde DeForest, 1844-1911) ゆかりの仙台東三番丁教会現・仙台北教会に送られ、ご両親の眠る北山輪王寺の墓所に納められた。以来、女史が帰天された七月二日には神戸女学院同窓会仙台支部の方々により墓前礼拝が守られ、学院からも過去数回、参列者があつた。一五年目に際し、学院当局の高配により当史料室から若山、吉田 (現・石村) の両名の仙台行きが許され、

女史に直接の教えを受けた先輩方から親しくお話をうかがう機会を与えられた。多くの方々が既にご高齢であるだけに、学院史上の一時期を実際に知る皆様との交わりは、貴重な経験となった。

「デフォレスト先生ご召天十五周年記念祭」は、一九八八年七月一日(金)、二日(土)の両日にわたって行なわれた。神戸女学院関係の参加者は、東京在住の同窓生一七名を中心に神奈川二名、千葉・福島・兵庫各一名、溝口百合同窓会長、美濃部美代子副会長、茂 洋学院チャブレン、山口光朔学長、津田庄八郎中高部長、廣澤和人中高部チャブレンに仙台支部の方々八名と我々二名の三八名であったが、これに、仙台北教会の故菅 隆志牧師夫人、菅 千代様、川端純四郎先生と姉上の川端安子様、同窓生の庄ノ 敬さんのご夫君、庄ノ昌士まさお氏のご参会もあった。

七月一日は仙台北郊の秋保温泉・ホテルクレセントで午後四時から開会礼拝とお話、午後六時から会食、翌二日は午前十時から輪王寺での墓前礼拝、午前十一時から仙台北教会で記念追悼礼拝と講演というスケジュールで、同窓会仙台北支部の若松茂登美支部長をはじめとする諸姉の手際よい運営により、すべて暖かい雰囲気うちに進化した。

仙台北教会の方々
菅牧師夫人、川端先生姉上、川端先生

初日の開会礼拝とお話は、ホテル別棟のチャペルで池田裕子さんの奏楽により始まった。歌われた讚美歌三〇〇番と三二六番はいずれもデフォレスト女史愛唱のもので、拝読された詩篇第二三篇は女史帰天の時、枕元に開かれていた聖書の箇所であった。廣澤チャブレンは式辞の中で女史の『わが心の自叙伝』にふれて仙台での女史の幼少期を回顧、母堂エリザベ

ス・スター・デフォレスト夫人 (Mrs. Elizabeth Starr DeForest, 1845-1915) が丹精こめられた庭の緑の中で育まれたことが、後々岡田山の緑を守る情熱につながったと強調された。そして、今後も学院の若い人々ともども緑を守り育て、女史の心に学ばねばならないと結ばれた。

礼拝は茂チャプレンの祝禱をもって終了。続いて溝口会長デフォレスト先生追懐のお話に移った。溝口会長はデフォレスト女史の在任中に学生時代をすごされ、また卒業後も引き続いて母校に奉職。デフォレスト先生が難しい教育勅語を流暢に読みこなされたことや、在校生たちが心をこめて企画した先生の還暦のお祝いのこと、さらに第二次大戦に至る暗い時代を経て米国への帰国を余儀なくされた先生の胸中を思い、愛校精神の中心に常に先生がいらしたと証しされた。そして最後に、ご夫君の故溝口靖夫教授に先生が送られた手紙を紹介、先生の暖かい心遣いを伝えるエピソードで話をしめくくられた。美しい生花に囲まれたデフォレスト女史の写真を前にして、女史の人徳をしるぶにふさわしいひとときであった。

夕刻よりホテルの食堂に場所を移して会食、その席では学院からの出席者の挨拶と三名の同窓生―出席者中最年長の増本喜美子さん、デフォレスト女史の許で秘書を務められた篠原愛さん、同窓会東京支部長の鷹野淑子さん―のスピーチがあった。お三方とも女史の在任中に教えを受けておられ、音楽担当であった女史が実技試験に列席なさると、その場の緊張感が大いに違ったことや、院長在任の時に、折りある度に届けられる贈り物を一切受け取らずにすべて丁寧に送り返したり、恵まれない人々に贈ったりなさったという回想談には、一同の間から思わず感嘆の声があがった。いずれのスピーチにも、教育者デフォレスト女史の面目躍如たるものがあり、こうした女史の志を受け継いでいくにふさわしい神戸女学院であるようにとの願いがこめられていて、女史の薫陶の賜物を感じさせるものであった。

翌日は梅雨空ながら雨もあがり、茂チャプレンの司式より一同揃ってデフォレスト家の墓前で記念礼拝の時を持った。ここで歌われた讚美歌四九四番、二九四番もデフォレスト女史愛唱のもの、ピリピン人への手紙第三章一七節―二二節「わたしたちの国籍は天にある」は、女史が戦後、学院に戻られて最初の礼拝のために選ばれたものであった。式辞では、一五年前の女史帰天の際、米国から届いた遺灰をお墓に納めたいきさつ、学院で行なわれた追悼記念式のこと、その後の墓前での記念礼拝についてお話があり、仙台の地に骨を埋められた女史のご両親の略歴が語られた。そして、日本の歴史が大きく動いた時、女史が大変な努力をして神戸女学院の教育を担い、学院のひとりびとりのことを思いつつ「常に神に愛される人として歩みたい」との理想をもって立っていらしたすばらしい教育者であったことを顧み、これからの神戸女学院もこの理想に従って進むべきであるものと確信させられる、と述べられた。それはまさに、出席者すべてがこの二日間

に新たにしたい思いそのものであった。その思いを代表して、溝口会長、篠原さん、同窓生の本間正子さん、山口学長が感謝の祈りを捧げられた。墓前への献花、祝禱をもって墓前での礼拝を終えた。

その後、前仙台支部長で長らくデフォレスト女史のお墓を守り先年帰天された故三島かほるさんに、讚美歌と感謝の祈りを捧げた（祈禱は友人の富田幸さん）。三島さんの所属教会の墓所はデフォレスト家の墓所のちょうど向かい側にあり、三島さんは生前から「先生の方を向いて休む」ことを楽しみにしておられたという。

また墓前では、茂チャプレんに記念撮影をしていただいた。

デフォレスト家墓前での記念礼拝
司式 茂チャプレ

輪王寺の美しい庭園を散策した後、この日の第二の会場である仙台北教会に移り最後の集まりをもった。この教会の前牧師の菅 隆志先生は、デフォレスト女史の遺灰を最初に受け取られた方であり、今回の記念祭のためにもご協力いただくはずであったが去る四月に急逝された。ここではまず、ご愛唱の讚美歌をもって先生を偲んだ。

茂チャブレンによる、デフォレスト女史のご両親についての紹介に引き続き、東北学院大学の川端純四郎先生から、東三番丁教会とデフォレスト家についてのお話をうかがった。デフォレスト女史の父君 J・H・デフォレスト博士は仙台東華学校設立のために仙台にいらしたが、その閉校により仙台組合教会(後に東三番丁教会)をひらき、この地での伝道につくされたとのこと。そのためこの教会は「デフォレスト・メモリアル・チャーチ」と呼ばれ、教会の人々にとって「デフォレスト先生」と言えばジョン・ハイド師であり、愛娘のことは「シャーロット先生」または「シャーレー先生」と親しみをこめて呼んでいたそうである。川端先生は、デフォレスト博士がご自身の来日の目的について「人格的感化を人々に伝えるため」と言っておられたことを紹介、女史の教育観にも父君のこうした考え方の影響があると思われる、と強調された。また、女史の手になる父君の伝記『*The Evolution of a Missionary*』(1914)には、父娘二代の宣教師精神のあらわれを見る思いがする、とも述べられた。講演の後、再び茂チャブレンにより故菅牧師のための祈りが捧げられ、讚美歌と黙禱をもって会を閉じた。祭壇の前で北教会関係の方々もまじえて記念撮影をしたのち、いちおう散会し、先を急ぐ出席者は帰途について。

記念祭の諸日程はこのように滞りなく行なわれ、出席者は皆それぞれの予定に従って仙台をあとにした。我々もまた、この計画の中心になって下さった同窓会仙台支部の皆様にごからの感謝を捧げると共に、デフォレスト女史が学院史に遺されたものを学院に在る者として守ってゆかねばならないと、強く実感したものであった。